熊本大学教育学部紀要，人文科学
第48号，39—47，1999

英語聞き取り試験導入と熊本大学入学者の英語能力 (2)

高木信之・島谷　浩・吉田道雄・A.ローゼン
登田龍彦・松瀬憲司・鈴木蓮一・村里泰昭
新井英永*・荘口博雄**

Listening Test in the Entrance Examination and English Language Ability of Kumamoto University Students (2)

Nobuyuki TAKAKI, Hiroshi SHIMATANI, Michio YOSHIDA, Alan ROSEN, Tatsuhiko TODA, Kenji MATSUSE, Ren-ichi SUZUKI, Yasuaki MURASATO, Hidenaga ARAI, and Hirowo SOHGUCHI

(Received September 1, 1999)

With the 1997 entrance examination, Kumamoto University started giving a listening test in its English language examination. In 1996, those accepted to Kumamoto University from seven different departments were given the Institutional Testing Program Level 2 Pre-TOEFL (Preliminary Test of English as a Foreign Language); the results were reported in Sohguchi et al (1996). Then in 1997, when students in two departments were given a listening test in the entrance examination, the Pre-TOEFL scores of the two groups, the two departments' students and the rest, were compared in Sohguchi et al (1998).

Finally, in 1998 all departments except one introduced a listening test in the entrance examination. This is the third and last report, in which the Pre-TOEFL scores of those in three consecutive years were surveyed and compared. In other words, the Pre-TOEFL scores of Group A students who took the listening test for two consecutive years, of Group B students who took it for the first time, and of Group C students who never took it were compared and analyzed in this article.

It has been found through the three-year study that while the students' grammar and composition abilities were generally on the decrease, their listening competence improved slightly. This, as the last two surveys predicted, suggests that the applicants and their high schools or preparatory schools have become more seriously involved in their preparation for the entrance examination listening test. This is a desirable tendency, which this project has aimed to confirm, if the decrease in grammar and composition competence is disregarded.

Key words : entrance examination, listening comprehension test, testing

1　はじめに

熊本大学では，1997（平成9）年度より入学試験の英語に段階的に聞き取り試験が導入された．本稿は，聞き取り試験導入がどのように高校英語教育に影響を与えるかを統計的に測定することを目的として，聞き取り試験前後の3年間にわたって実施した熊本大学入学者の英語能力調査の最終報告である．

---

*　熊本大学文学部
**　熊本大学名誉教授

調査初年度，すなわち1996年度の調査は，聞き取り試験導入前の熊本大学入学者の英語能力の基礎データを収集することを目的に1996年度の新入生を対象として，全学部から1クラスずつ選んで実施された．英語能力データを収集するために利用されたのは，Pre-TOEFLというテストで，これは，学校などの団体が主催するTOEFL Institutional Testing Program（ITP）の一つである．荘口他(1996)は，聞き取り試験導入の決定から実施に至る経緯，Pre-TOEFLの内容，1996年度新入生のPre-TOEFLの成績を報告した．

1997年度の調査は，聞き取り試験が一部の学部に導入された初年度の英語能力データを収集するために，1996年度と同じようにPre-TOEFLが全学部で新入生を対象として1クラスずつ実施された．1997年度の個別学力試験で，聞き取り試験が導入されたのは，文学部，医学部，理学部生物学科の3学部であった．理学部生物学科については，クラス編成の都合で，Pre-TOEFLの試験が実施できなかったため，聞き取り試験導入前後の成績を比較できたのは，文学部と医学部の2学部のみであった．荘口他(1998)は，聞き取り試験を受験して入学した文学部と医学部の新入生のグループと，聞き取り試験を受験していない教育学部と法学部の新入生のグループのPre-TOEFLの成績を比較した．その結果，両グループとも聴解力の平均点が，他の文法・作文力と読解力の平均点が大幅に低下しているにもかかわらず，僅少ながら上昇していることから，高校の指導において，聞き取り試験への対応が進んでいることが推測されると結論づけた．

1998年度には，教育学部，法学部，工学部の入学試験に聞き取り試験が導入され，全面導入が完成した．(ただし，薬学部と理学部の生物学科以外の学科が個別学力試験に英語を課していないので，完全導入ではない．)本稿は，1998年度の調査結果を報告するとともに，3年間におよんで収集したデータの分析結果をもとに，聞き取り試験導入が熊本大学入学者の英語能力に与えた影響を考察することを目的とする．

2　調査方法

1998年度の英語能力調査も前2年度と同様に，Pre-TOEFLを，全学部の新入生1クラスずつを対象に実施することにした．Pre-TOEFLというテストは，学校などの団体が主催するTOEFL ITPの一つで，荘口他(1996)によりすでに，その概要については報告されているが，このテストの内容とこのテストを利用した理由は次の通りである．

Pre-TOEFLは，正規のTOEFLの成績が500点以下の受験者，すなわち初級から中級レベルの英語力を持つ学習者を対象に作成されたTOEFL入門用のテストである．短時間で実施できるように問題数が少なくなっており，最高得点が500点となっているが，その成績は，正規のTOEFLの成績と高い相関関係があると言われている．

Pre-TOEFLは，正規のTOEFLで500点以上の成績を獲得できる受験者の得点がすべて500点となってしまい，上級レベルの学習者の英語能力を把握することができないという欠点がある．しかし，大学の90分の授業時間内で実施が可能で，実施日を自由に設定でき，受験料が非常に安く，成績の送付が早いことと，大学入学時の一般の学生でTOEFLで500点を超える能力を持つ学生がそれほど多数を占めないと予想されたため，本研究の英語能力調査のためにPre-TOEFLを利用することにした．表1は，国際教育交換協議会日本代表部(1999)が示したPre-TOEFLと正規のTOEFLの内容の比較である．

表1　Pre-TOEFLと正規のTOEFLとの比較

	Pre-TOEFL		正規の TOEFL	
1. 問題構成	解答時間	問題数	解答時間	問題数
Section 1	約22分	30問	約35分	50問
Section 2	17分	25問	25分	40問
Section 3	31分	40問	55分	50問
全体	約70分	95問	約115分	140問
2. テスト成績	最低点	最高点	最低点	最高点
Section 1	20点	50点	31点	68点
Section 2	20点	50点	31点	68点
Section 3	20点	50点	31点	67点
全体	200点	500点	310点	677点
3. 一人あたりの受験料	¥2,430*（200名以上受験の場合）		¥13,500*	
4. スコア送付	テスト返却後（通常）10日		テスト後約1ヶ月半	

* 1999年7月1日現在（消費税込み）

3　調 査 結 果

下記の表2－1から表2－7は，1996年度から1998年度にかけて実施されたPre-TOEFLの各学部ごとの被験者数，総得点と各セクション（Section Iは聴解力，Section IIは文法・作文力，Section IIIは読解力）の平均点，総得点の最高点と最低点を示している．表2－8は，全学部についての集計結果である．

表2－1　文学部入学者

実施年度	被験者数	総得点	Section I	Section II	Section III	最高点	最低点
1996年度	43	412.5	39.8	42.8	41.2	453	350
1997年度	44	410.0	41.1	41.2	40.7	467	363
1998年度	42	403.2	42.6	37.0	41.4	483	337

表2－2　教育学部入学者

実施年度	被験者数	総得点	Section I	Section II	Section III	最高点	最低点
1996年度	41	405.8	39.2	42.4	40.2	483	323
1997年度	43	409.7	42.2	40.4	40.4	477	357
1998年度	41	396.5	40.0	39.9	39.0	440	317

表2－3　法学部入学者

実施年度	被験者数	総得点	Section I	Section II	Section III	最高点	最低点
1996年度	45	423.3	41.4	42.6	42.4	480	367
1997年度	44	415.2	41.1	41.8	41.6	463	327
1998年度	45	414.1	40.9	41.9	41.4	487	303

表2－4　医学部入学者

実施年度	被験者数	総得点	Section I	Section II	Section III	最高点	最低点
1996年度	33	444.2	43.2	47.4	46.3	500	383
1997年度	29	442.3	43.2	45.4	44.0	500	393
1998年度	26	439.9	43.3	43.5	45.2	500	390

表2－5　理学部入学者

実施年度	被験者数	総得点	Section I	Section II	Section III	最高点	最低点
1996年度	41	395.0	39.6	39.6	39.3	447	333
1997年度	49	388.9	40.0	38.6	38.1	453	333
1998年度	47	382.3	38.7	38.1	37.9	453	320

表2－6　薬学部入学者

実施年度	被験者数	総得点	Section I	Section II	Section III	最高点	最低点
1996年度	45	404.6	38.7	41.8	40.9	453	367
1997年度	42	389.0	39.2	38.4	39.1	443	340
1998年度	47	408.5	40.6	41.2	40.8	483	327

表2－7　工学部入学者

実施年度	被験者数	総得点	Section I	Section II	Section III	最高点	最低点
1996年度	46	387.0	38.7	39.1	38.3	457	330
1997年度	47	383.6	38.7	38.2	38.2	453	323
1998年度	44	383.9	39.5	38.0	37.6	463	340

表2－8　全学部合計

実施年度	被験者数	総得点	Section I	Section II	Section III	最高点	最低点
1996年度	294	409.1	39.8	42.0	41.0	500	323
1997年度	298	403.3	40.7	40.3	40.1	500	323
1998年度	292	401.7	40.6	39.7	40.2	500	303

既述したように，Pre-TOEFL は，正規の TOEFL で 500 点以上の成績獲得の可能性がある受験者の得点がすべて 500 点となる．各セクションの得点も上級レベルの受験者は，50 点満点となり，得点は頭打ちとなってしまう．表 3 は，全受験者の満点得点者数の 3 年間の推移を示している．聞き取り試験導入前の 1996 年度と全面導入が完成した 1998 年度を比較すると，Section I(聴解力）の満点者数が倍増していることがわかる．しかし，Section II（文法・作文力）の満点者数が半減している事実も見逃せない．これらの理由については，後述する考察において検討する．

表3　満点得点者数の推移

実施年度	被験者数	総得点	Section I	Section II	Section III
1996 年度	294	2	4	42	12
1997 年度	298	2	2	14	7
1998 年度	292	2	8	21	17

4　結果の分析

1998 年度の報告では，文学部，医学部，理学部生物学科の 3 学部が，聞き取り試験が導入されて 2 年目となる学部であるが，クラス編成の都合で，理学部生物学科の Pre-TOEFL の試験を実施できなかったため，聞き取り試験が 2 年目となる学部のうち，文学部と医学部の 2 学部のみ成績分析対象となり，予想通り聴解力が継続して上昇するかどうかが調べられた．この 2 学部を学部群 A とする．教育，法，工学部では，1998 年度入試から聞き取り試験が導入されたので，この 3 学部の成績は，聞き取り試験導入初年度の成績として，前年度と比較されることになった．この 3 学部を学部群 B とする．最後に，個別学力試験に英語を課していないため聞き取り試験未導入の薬学部の入学者の成績も比較された．この学部を学部群 C とする．

表4－1　学部群A（文＋医学部）

		総得点		Section I		Section II		Section III	
実施年度	被験者数	AVG	SD	AVG	SD	AVG	SD	AVG	SD
1996 年度	76	431.50	31.53	41.26	3.95	44.78	4.42	43.39	3.75
1997 年度	73	422.94	32.44	41.97	3.20	42.85	4.31	42.03	4.33
1998 年度	68	417.24	36.57	42.87	3.66	39.49	5.50	42.81	4.91

表4－2　学部群B（教育＋法＋工学部）

		総得点		Section I		Section II		Section III	
実施年度	被験者数	AVG	SD	AVG	SD	AVG	SD	AVG	SD
1996 年度	132	402.55	44.46	39.69	3.38	41.57	4.84	40.31	4.03
1997 年度	134	402.35	30.00	40.58	3.38	40.06	4.21	40.02	4.02
1998 年度	130	398.31	32.56	40.16	2.83	39.95	5.27	39.38	4.25

表4－3　学部群C（薬学部）

		総得点		Section I		Section II		Section III	
実施年度	被験者数	AVG	SD	AVG	SD	AVG	SD	AVG	SD
1996年度	45	404.64	21.32	38.69	2.82	41.80	3.95	40.91	3.23
1997年度	42	389.02	27.54	39.24	2.56	38.40	4.10	39.10	4.10
1998年度	47	408.49	30.24	40.55	3.01	41.19	4.00	40.79	4.53

表4－1から4－3は，各学部群のPre-TOEFLの総得点と各セクションの平均点（AVG）と標準偏差（SD）の3年間の推移を示すものである．

先ず総得点の平均点の推移を見ていくことにする．学部群Aと学部群Bにおいては，各年ごとの平均点の差について検定したところ有意差は認められなかった．ただし，学部群Aでは，聞き取り試験導入前の1996年度と導入2年目の1998年度を比較すると，5%水準の有意差が認められた．聞き取り試験が導入されていない学部群Cにおいては，各年ごとの平均点の差に1%水準の有意差が認められたが，これは何らかの事情による1997年度の落ち込みが激しかったためで，回復した1998年度と1996年度との間には有意差は認められなかった．

Section I（聴解力）の平均点の推移を見ていくと，これも，学部群Aと学部群Bにおいては，各年ごとの平均点の差に有意差は認められなかった．しかし，学部群Aで，聞き取り試験導入前の1996年度と導入2年目を比較すると，聴解力の平均点の上昇に5%水準の有意差が認められた．学部群Cでは，1997年度と1998年度間の平均点の差に5%水準の有意差，そして1996年度と1998年度の平均点の差には1%水準の有意差が認められた．聞き取り試験を導入していない学部において，聴解力の平均点の上昇が顕著であったのは皮肉な結果ではあるが，高校の聞き取り試験対策の指導が広範に実施されていることを反映する結果とも考えられよう．

Section II（文法・作文力）の平均点の推移を見ていくと，学部群Bの聞き取り試験導入前の1997年度と導入年の1998年度間に有意差は認められなかった以外，全ての学部群において，各年ごとに文法・作文力の平均点の差に1%水準の有意差が認められた．特に，学部群Aと学部群Bにおいては，文法・作文力が年ごとに低下してきていることがはっきりした．

最後に，Section III（読解力）の平均点の推移を見ると，学部群AとCで，1996年度と1997年度間の平均点の差に5%水準の有意差が認められた以外，有意差は認められなかった．特に，聞き取り試験導入前の1996年度と全面導入が完成した1998年度を比較すると，全学部群において読解力の平均点の差に有意差は認められなかった．読解力については，調査期間の3年間において大きな変化がなかったと言えよう．

6　考　　察

本調査は，荘口他（1998）に引き続いて，熊本大学入学試験の英語に1997年（平成9年度）から導入された聞き取り試験の高校英語教育に与える影響を統計的に測定したもので，その前年に聞き取り試験導入以前の新入学生を対象とした荘口他（1996）を第1報とすれば本稿は第3報最終報告に当たる．

当初予測され，第2報で中間報告されたように，熊本大学への聞き取り試験導入は高校や予備

校等に聞き取り試験対策を採らせる結果を生み，このことは，その成果として本学入学生の聞き取り能力が，文法・作文能力がかなり低下する傾向にありながら，横這いもしくはわずかながらも上昇していることによって確かめられる結果となった．表2－8が示すように，総得点の平均が全般的にやや下降している中にあって，聞き取り能力は善戦していることが窺える．また，聞き取り試験がいくつかの学部に限って導入された1997年度入試では，Pre-TOEFLの総得点平均が総じて下がり，表3が示すように，各セクションの満点者が大幅に減少したものの，聞き取り試験の全面導入になった1998年度には，回復の兆しを見せていることが明らかになった．これは，伝統的な受験勉強を続けてきた割と高学力の志願者が，聞き取り試験が課されることになった学部を一時的に回避したものの，全面導入や高校側の指導に伴って元の鞘に収まったのではないかとの推測も可能である．もちろん，それ以外の複雑な要因も絡んでいるのであろう．

さらに，第1報で報告されたように，聞き取り試験導入以前の入学生は他の能力に比べて聞き取り能力の低さが指摘されていたが，導入に伴ってその差は縮まり，1998年度では，個別学力試験にもともと英語を課していない学部群C（薬学部）を除けば，学部群AでもBでもむしろ逆転していることが判明した．このことは，聞き取り試験導入が受験者の聞き取り能力を押し上げていることを窺わせるもので，コミュニケーション能力の育成を旗頭にしている日本の英語教育界にとっては，好ましい現象といえるだろう．木村(1997)は，大学入試に聞き取り試験がなかなか導入されない理由として，志願者減少などのマイナス面への懸念があることを報告しているが，確かに一時的には受験者の回避などのなんらかの影響があるかもしれないが，コミュニケーション能力の向上に寄与した事実が統計的に確認できたのは大きな収穫であったと言えよう．しかしながら，文法・作文の能力が総じて低下の傾向を見せていることも見逃してはならない．コミュニケーション能力は4技能や背景的知識等の統合的な能力を指すべきものであって，こうした低下傾向が，もし高校生等の英語力の基礎基本の低下を示すものとすれば，聞き取り能力のわずかな上昇をもって単純に喜ぶ訳にはいかないだろう．

5　おわりに

本調査は，荘口他（1996）によれば，(1) 大学入試への音声テスト導入が聞き話す英語の達成にいかに有効であるかを証明することと，(2) 同音声テスト導入の成果をTOEFLという国際的な基準によって示すことを目的として開始された．そのために，「同音声テスト導入が話す英語の力を増進するのにいかに効果的であるかを統計的に示し，その結果を公表することによって，同音声テストが全国の大学において実施されること」を願って作業が始まった．

しかしながら，荘口他(1996)及び荘口他(1998)，そして本稿で述べたように，本調査はTOEFLの成績を通して熊本大学入学生の英語聞き取り能力を測定することから始まり，「聞き取り試験が高校英語教育に与える影響を統計的に測定すること」をその目的とした．つまり，当初掲げられた目的のうち，特に話す英語力増進に関わる有効性については，その焦点が曖昧になっていったことになる．しかし，この種の調査でそこまで求めること自体に無理があるので，このことはむしろ当然の帰結である．それよりも熊本大学入試への音声テスト漸次導入の前後3年間に亙って，Pre-TOEFLを新入学生に対して実施し，大学入学時の7学部に及ぶ英語の好き嫌いや留学願望の有無に関わらない全般的な学生の英語力を国際的な基準によって示したことと，入試における音声テストとして，現状では実行可能な聞き取り試験をほぼ先駆的に実施し，入学生の聞き取り

能力と他の能力との関係が同テスト導入に伴ってどのように変化したかを測定したことに大きな意義があると思われる．

これまでも繰り返し述べられてきたように，Pre-TOEFL は主催者の都合に合わせて，低価格でしかも大学の授業時間内に実施でき，しかも TOEFL との相関関係も高い等の長所を持ち合わせている一方で，高学力者の能力を測れないことに問題が残る．また，もともと TOEFL は留学を強く希望する受験者のための試験であるから，一般の学生を対象に必修科目の授業の一コマを使って行われる Pre-TOEFL の結果の解釈には慎重にならねばならない．つまり，Pre-TOEFL の結果が TOEFL と高い相関関係にあるとしても，それを安易に TOEFL 受験者の平均点と比較することがあってはならないだろう．熊本大学と同様に，多くの学部学科の一般教育を履修する入学生を対象に Pre-TOEFL を実施した国内外の多くの大学のデータが入手できれば，日本の英語教育の問題点に一石を投ずる分析や考察が可能となるだろう．

本研究は今回の報告をもって終了するが，3 年後あるいは 5 年後に同様の調査を実施して，その推移や問題点を考察する余地は十分に残されている．いずれにしても，今後は，大学入試においてコミュニケーション能力を測る試験として，どのような出題をすべきかが継続的に検討されねばならない．

折から，平成 11 年 8 月 28 日付けの熊本日日新聞朝刊に，「文部省と大学入試センターは，すべての国公立大学と過半数の私立大学が利用し 50 数万人が受験する大学入試センター試験で，英語のリスニング（聞き取り）試験を導入するため，方法や課題を本格的に検討する方針を決めた」との記事が掲載された．なお平成 12 年度入試では，聞き取り試験を課す大学が国立大学だけで 45 大学 110 学部になるとも報道されている．聞き取り試験の会場やコスト面の問題も指摘されてはいるが，近い将来大学入試センター試験に，聞き取り試験が導入されることを強く希望する．

謝　　辞

この調査は，本学入試に英語聞き取り試験を導入することに積極的に取り組まれた福田昇八先生（平成 10 年 3 月定年退官）ほか英語部会，附属教育実践研究指導センター等の多くの協力のもと行われた．経費については，平成 8 年度の熊本大学教育研究学内特別経費，平成 9，10 年度の教育改善推進費の助成を受けて実施されたことを報告し，ここに謝意を表します．

参 考 文 献

大学入試センター聴解試験プロジェクトチーム　1985 『共通一次学力試験の外国語の聴解試験についての調査研究報告書』 大学入試センター

Educational Testing Service. (1999). *TOEFL Institutional Testing Program 1999-2000*. Educational Testing Service.

Educational Testing Service. (1999). *TOEFL Test and Score Data Summary 1999-2000 Edition*. Educational Testing Service.

木村真治　1997 「大学入試とリスニング」『英語教育』46(7)，19-21.

国際教育交換協議会日本代表部（カウンシル）　1999 『TOEFL-ITP サマリーブック 1999-2000 Edition』国際教育交換協議会日本代表部

荘口博雄・福田昇八・T. ラスカウスキー・池田志郎・井原健・松瀬憲司・A. ローゼン・斎藤靖・里見繁美・鈴木蓮一　1996 「トフル成績から見た熊本大学学生の英語聞き取り能力」『熊本大学教育学部紀要（人文科学）』，45，161-167.

荘口博雄・福田昇八・吉田道雄・T. ラスカウスキー・鈴木蓮一・池田志郎・松瀬憲司・A. ローゼン・村里泰昭・斎藤靖・瀧口明子　1998 「英語聞き取り試験導入と熊本大学入学者の英語能力(1)」『熊大教育実践研究』，15，57-61.

荘口博雄　1998 「英語聞き取り試験の導入について」『熊本大学学報』，551，10-11.